



三 愛 学 園

児童養護施設さんあい

一時保護施設

三愛子ひつじ寮

社会福祉法人 三愛学園

〒369-0212 埼玉県深谷市櫛挽 15-2

Tel 048-585-0605 Fax048-585-0562

Mail san-ai@isis.ocn.ne.jp

URL san-ai-jidouyouto.org



「自立した生活とは」

社会福祉法人三愛学園理事長 高瀬一使徒



さんあいでは、創設記念祭が終わった後、卒園児や元職員たちが交流ホールに集まって短い同窓会を開くのが恒例となっています。ことしは 20 名ほどの方々が集まり近況を語り合っていました。地元や県外で働き、休みを調整して参加した人たち、学業や子育てに奮闘中の方々と様々です。共通なことと言えば、様々な形ではありますが、みんな自立した生活を送っているということです。特に児童福祉や障害福祉に携わる方々にとって「自立」という言葉は日常的に使う言葉です。スマホで「自立とは？」と検索してみるとAIによる論理的で簡潔な答えが返ってきます。また専門家や福祉の現場で働いている方々の自立の定義を読むこともできます。それらの情報をベースに私自身の思いを重ねながら自立した生活とは何かを考えてみました。

まず、自立とは「身体的自立」「経済的自立」「精神的自立」「社会的自立」の4つ領域に整理することができます。そして自立しているとはそれぞれの領域を単独で満たしてゆくことだけではなく、他の人たちの助けを借りて満たして行くこともできるとあります。特に福祉現場の視点で考えると、利用者が「**他者の支援を受けながら自分らしく生きること**」と簡潔に定義することができるのではないのでしょうか。身体的なハンデ等、各領域でハンデのある人にとって自立した生活を送るのは不可能ではありません。共助や公助に頼ってハンデを補ってゆき自立することは可能なのです。逆説的に言うと4つの領域すべて単独で自立した生活を送っていると自負する人がいたとしても、いつか老いがやってきます。老いは単独での身体的自立を確実に奪ってゆきますし、それによって精神的自立や社会的自立が影響をうけます。ですから他者の支援があるから自立した生活が送れると考えた方が適切ではないのでしょうか。「おかげ様で」とは日本語独特な言い回しで大変にいい言葉です。私たちは周りのおかげで自立できているのです。キリスト教でも、「人は不完全なものであるから一人で自立しようと高慢にならずに神に頼って生きるべき」と教えます。自立は神の恵みなのです。

今回の同窓会には近くのグループホームから参加した子たちがいます。福祉サービスを利用しながら就労し安定した生活を送っています。休みの日には趣味や友達と会って楽しく過ごしているようです。またさんあい祭りではボランティアをしてくれ、時々職員や子どもたちにお菓子の差し入れもしてくれます。他者の支援を受けながら自立した生活を送っている彼らの存在は、児童福祉に関わるものに達成感とやりがいを感じさせてくれます。

創立の原点



児童養護施設さんあい 施設長 平本 実

1945 年 3 月 10 日の東京大空襲。そこで家族と住む家を失った兄弟は埼玉県の子
童養護施設に入所します。焦土と化した日本でしたが、その後、世界銀行など国際機関
からの支援、ラウ物資をはじめとした民間による援助も受けて、社会経済の復興を遂げ
ていきます。成長して施設を退所した兄・高瀬美彦先生は農業に従事、弟・美武先生は
児童養護施設の職員になりました。後年、その二人が力を合わせて作ったのが三愛学園（現さんあい）です。今
から 49 年前のことでした。

初代園長となった高瀬美武先生は、職員向けの冊子の中で、さんあい創設の経緯を以下のように記しています。
「昭和 40 年代後半、いわゆる『オイルショック』で、全国的に失業や離婚が増加し、児童養護施設が足りない
状況になっていました。埼玉県でももちろんのことで、自分は当時春日部市の『子どもの町』の処遇部長で、子
どもの入退所調整窓口の役割も負っていました。入所依頼があっても断らなければならないことが多く、結局、
自分で施設を作り、少しでも養護を必要とする子どもを受け入れる決心をしました。」

半世紀を経た現在も、児童養護施設への入所依頼は減ることなく、子どもたちが抱える課題も複雑、多様化し
ています。さんあいに対する期待も増えることはあれ、減ることはありません。いっぽう世界に目を向けると、
80 年前を彷彿とさせる戦争が各地で繰り広げられており、そこで苦しむ数えきれない子どもたちがいることを、
私たちは決して忘れてはなりません。創立者の体験、そして思いはさんあいの原点です。創立記念日を迎えて、
あらためてその原点に立ち返ることの大切さを胸に刻んでいます。

第 7 回 同窓会

さんあいまつり終了後、交流ホールにて、第 7 回同窓会が
開催されました。開催を決めてから日があまりなかったた
め周知が行き届かず、参加人数は例年より少なめでした。それでも
卒園生 12 名、現役・退職職員 11 名、卒園生のお子さん 3 名の参
加を得て楽しい再会の時となりました。

当日は、一人一人の自己紹介・近況報告の後、お菓子をつまみな
がら歓談の持ち、その後は恒例のビンゴ大会を実施しました。

職員も昔のように動けないだろうと気遣いさんあいまつりか
ら手伝いに来てくれた人、転職をして新しい仕事に果敢に挑戦し
ている話しをしてくれた人、久しぶりに会った同期や職員と昔話
に興じる人など、皆それぞれに楽しい時間を過ごし散会となりま
した。



さんあい祭り

前日の大雨がうそのように止んでお祭り日和となった6月1日。
49回目の創立記念日、さんあい祭りが開催されました。

開会式では、まず理事長よりこれまでさんあいを支えてくださった方々への感謝が表されました。続いて創設者の名誉園長の挨拶、子ども達からお店の紹介、出店してくださった有志の皆様のご紹介の後、さんあい祭りがスタートです。

今年も、たくさんのボランティアの方々、ダンスや太鼓のアトラクションでお祭りを盛り上げてくださった皆様、新鮮な野菜を提供して下さりお腹も心も満たして下さる農家の方々、キッチンカーや物産、手作りパンを出店して下さった方々、ご来場して下さった皆様、たくさんの方のご協力・ご支援を賜り大盛況のさんあい祭りとなりました。来年は50回目の節目の年。また多くの皆さんをお迎えして、楽しいお祭りが開催されることを今から楽しみにしたいと思います。



2024年度活動報告

社会福祉法人三愛学園の3つの事業拠点から、2024年度の活動をふりかえり報告をいたします。

児童養護施設さんあい・女の子ブロック

2024年度の女の子ブロックは、18名の児童と15名の職員でスタートし、大きな事故や病気もなく一年を終えました。

いちょうさんでは6名の児童のうち小学生が4名と例年より多い構成となり、職員にとっては挑戦の年でした。子ども同士の些細な言い合いは日常茶飯事で、どうしたら仲良く遊び、生活できるか頭を悩ませる一年でした。それでも部屋全員の外出やお部屋での食事イベントを通じ、子どもたちの笑顔や成長を実感する場面が多く見られました。

ポブラさんは多才な児童が集まり、行事ではその才能を発揮。山梨への旅行ではアトラクションや桃狩りを楽しみ、卒業や受験など節目の成長も見守ることができました。



ねむの木さんは、地域小規模移行に伴い職員5人で始動。引っ越しの予定が年度当初から年末にずれ込みましたが、その間、新潟での旅行や日常の関わりを通じて子どもたちとの関係を深めました。途中、職員の退職により体制は4名となりましたが、1月1日、無事、地域小規模での生活が始められました。

全体として職員間の「報告・連絡・相談」を徹底し、危機管理を意識したことで、安定した運営が行えました。今後も職員の孤立を防ぎ、全員で子どもを育てる意識をさらに強めていきます。また、女の子は内面の課題が見えにくいため、職員一人ひとりがアセスメント力を高め、子どもの行動の背景にある要因を把握し、支援に活かすことが重要とされています。過去・現在・未来の視点で子どもたちを見つめ、安心安全な生活環境の実現を目指していきます。

児童養護施設さんあい・男の子ブロック

男の子ブロックは、R5年度の小学生2名の家庭復帰に伴い、新たに未満児1名と年中児1名を受け入れてスタートしました。児童の6割以上が小学生以下と年齢層が低く、職員は宿題支援や日常生活のサポートに追われ、日々多忙を極めました。個別対応と全体支援の両立が求められ、子ども同士のトラブルで負傷者が出る事例も発生しましたが、中高生が多い部屋で過ごした未満児には丁寧な関わりができ、愛着形成が進んだという成果が見られました。



途中、職員の退職や怪我による休職もありましたが、職員同士の連携や、中途採用の職員の加入により養育体制を維持し、安定した支援を継続できました。また、中3の時に精神的不調から入院を経験していた高校1年生2名は、今年は大きな落ち込みなく生活を送り、無事進級を果たしました。日々丁寧に向き合った職員の努力が、子どもたちの回復を支えました。

年度末には、高校3年生の児童が支援学校を卒業し退所。グループホームに住み、飲食店での就労を開始しました。幼少期には癇癪や感情の波に苦しんだ児童でしたが、その成長に職員一同が感無量となりました。また、小学3年生の児童も家庭復帰を果たし、心を込めたメッセージを残して退所していききました。

一方で、今年度末には職員4名が退職。年度末にそのことが子どもたちの知るところになると、中には涙を流す子や動揺する子もあり、日々の信頼関係の深さがうかがえました。新年度はまた新たな職員体制で臨むこととなりますが、これまでと同様に子どもたちと共に育ち合う関係づくりを目指していきます。

一時保護所「オリーブ」

一時保護所「オリーブ」では、通園や通学、外出が制限される子どもたちに、楽しさや新しい体験を提供することを目的に、職員が様々な行事や活動を企画しています。

男の子オリーブでは、夏の川遊びや秋のバーベキュー、外食体験、図書館や買い物など、日常的かつ刺激的な活動を実施。子どもたちは生き生きとした表情を見せ、少しずつ職員との信頼関係を築きながら、自分の気持ちや経験を語るようになっていきます。また、「さんあいまつり」や「クリスマス会」などの園の行事にも参加し、同世代との交流も大切にしています。



女の子オリーブでは、職員 4 名の内 3 名が一時保護所に初めて配属されるという体制の中、密な情報共有と連携を図りながら支援を行いました。特に力を入れたのは子どもとの 1 対 1 の時間で、就寝前の会話や個別外出を通じて、子どもたちが安心感を得て心を開けるよう工夫しています。また、楽しい記憶を心の支えにしてほしいという思いから、春のお花見、夏のプール、秋のこんにゃくパーク、冬のラウンドワンなど、季節ごとの行事も積極的に実施し、非日常の体験を提供しました。



また、昨年に続き今年も、小学 6 年生対象の修学旅行体験を実施。子どもたち自身が事前に調べ学習を行い、電車で目的地を訪れるという体験を通じて、「保護中だったからできなかった」と感じさせない工夫をしました。近年は保護期間が長期化する傾向にありますが、オリーブでは子ども一人ひとりのペースに合わせた支援を重視し、日々の成長を支える環境づくりに努めています。職員も学びを深め、より良い支援ができるよう努力を重ねています。

自立援助ホーム「三愛子ひつじ寮」

三愛子ひつじ寮では、令和 7 年 3 月末時点で定員 9 名中 8 名が在籍し、うち女子が 7 名でした。新規入居者は 5 名で、自宅や里親宅からの入居に加え、緊急保護や他県シェルターからの受け入れも実施。退去者 2 名はグループホーム移行や就職による自立が理由でした。

利用者支援では、個々の背景を丁寧に聞き取り、主体性を尊重した個別支援を行いました。関係機関と連携し、法律相談や福祉サービスも活用。退所後のアフターケアにも力を入れ、イベント時には自主性を育む機会を提供しています。また、家庭的な生活を目指し、調理専門職員を配置し、移動支援のために車も導入しました。

職員環境の整備にも注力し、外部講師によるスーパービジョンを実施。パート職員の増員により勤務負担が軽減され、連勤の削減や休暇取得の推進で働きやすい体制を構築しました。さらに、新任職員を他施設で研修させるなど、専門性向上にも努めました。

財政面では、児童手当や医療支援の拡充、自立支援職員配置による加算、民間基金の活用などで多様な支援を確保。ネットショッピングの導入で日用品の購入も効率化されました。学業を希望する利用者には奨学金で経済的支援を行っています。

地域連携では、マナー指導や地域美化活動に取り組み、地域への理解と受け入れを促進。公共施設を訪問し、ホーム制度の周知も行いました。

法人との連携では、理事長との定期面談や職員会議を通じて運営方針を確認し、経理や労務管理についても事務長の助言を受けながら安定運営を図りました。



ねむの木

4月から新たなメンバーを迎えたねむの木。縁側に座っておやつを食べたり、気付くと小学生が玄関で宿題をしたりと（笑）、本園では見られなかった光景が広がっています。そんな楽しい生活の裏では、職員と庭の雑草たちとの壮絶な戦いが繰り広げられています。どんなに頑張っても数日後には生えてきてしまう雑草たちに打ち勝つため、毎月「庭整備の日」を作ることにしました。業者の人のように草刈り機を使いこなすリーダーに、様々な農具を操るケアワーカー…職員皆が庭整備のプロになりつつあります（笑）。1日汗水流してもあまり変わらない姿に心が折れそうになる時もありますが、これからも職員同士励まし合い、子どもたちの生活環境を整えていきたいと思います。（河村）

子ひつじ寮

入所当初、何事も「自分でできる」というマインドが強く、不安に思っていることや助けてほしいことを中々、口に出せなかった利用者が、1年経ち「やり方がわからないから不安」「最初だけ付き添ってほしい」と言えるようになりました。その言葉をもとに支援をしていく中で、感謝の言葉も増えました。“求める、助けてもらう、感謝をする”この経験が活かされ、互いに助け合い、感謝し合う人間関係を築いていってほしいと願います。(渡邊)

小学校運動会

先日の小学校の運動会では、4 月に入学したばかりの新一年生にとっては入学して初めての運動会。大勢の保護者に見守られ、いつもとは違う雰囲気にと緊張していたことと思います。

固い表情をしているのではないかと心配しましたが、思いのほか柔らかな表情と笑顔で、徒競走では堂々とした走りを見せてくれました。

まだ始まったばかりの小学校生活。これから大変なこともたくさんあると思いますが、少しずつ自信をつけ、楽しい思い出をたくさん作ってほしいと思います。（岩崎）

JSF イベント

ゴールデンウィークの中日、一般社団法人 JSF 様のご協力により、子どもたちを対象とした昼食の提供とカット・ネイル体験のイベントが開催されました。JSF は「未来ある、こども達に笑顔を」という理念のもと、様々な企業の協賛を得て活動している職業人の団体です。イベントでは、文房具や玩具のプレゼントもあり、子どもたちは大喜び。昼食には焼きそばや焼き鳥、パンが振る舞われ、何度もお替りをする子どもも多く見られました。午後からのカットやネイル体験も、現役のプロの方々が無償で技術を提供してくださいました。子どもの日を前に、笑顔あふれる特別な一日となりました。JSF の皆様に心より感謝申し上げます。（平本）

中学校体育祭

5月23日、岡部中学校体育祭が行われました。天気は曇り、絶好の体育祭日和です。開会式では多くのさんあいの中学生達が手を振ってくれて、こちらの応援にも気合いが入ります！一本の棒を仲間と運ぶハリケーン、山あり谷ありの障害物競走、皆で気持ちをひとつにして飛ぶ大縄、絆と友情で繋ぐリレー、見ているこちらも力が入り写真を撮るのも忘れて熱くなりました。勝負では勝者と敗者で明暗が分かりますが、終わった後はみな晴れやかな表情でした。仲間と全力で力を合わせて最後までやり遂げた事が何より嬉しかったからでしょう。職員達もたくさんの力をもらいました。感動をありがとう！（齋藤）

男子オリーブ

4月からは在籍児童3人でスタートしました。職員の異動もあり、始めはお互いの距離感を探り合いながらの生活でした。少し慣れてきた頃、新たに入所した児童も一緒に公園へ出かけました。青空の下、ふわふわドームで元気に飛び跳ねる子供たちを見て、職員もたくさん元気をもらいました。また別の日には、しいたけ狩り、いちご狩りにも行きました。競争するかのようにしいたけを収穫したり、お腹一杯いちごを食べてきた子もいました。

一時保護の子ども達は気軽に園外に出ることができません。可能な限り外出する機会を設け、子ども達が心身共にリフレッシュできるようにしていきたいです。(小町)



いつもあたたかいご支援ありがとうございます。

ご寄付は同封させていただいた振込用紙、または下記の口座をお願いします。*お名前をお入れください*

埼玉りそな銀行 岡部支店 (普) 0058888 功) 廿アハク ㄱㄴ 리즈 초우타카츠 外

編集後記

梅雨のこの時期から既に暑い日が続いていますが、この夏、日本で最も熱いのは、現在、開催中の大阪・関西万博かもしれません。準備の遅れや会場設備への不安、高額な入場料などの批判から、前評判では賛否両論が渦巻いていましたが、実際に訪れた人からは高い満足度を示す声も上がっているようで、連日盛況の話題をニュースで耳にします。さらに万博の特集番組を見たりすると、万博のテーマである「いのち輝く未来社会のデザイン」に俄然興味が湧いてきます。是非一度足を運んでみたいです。（広報タスクチーム一同）